慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中島健一著 稲作社会の発展構造
Sub Title	
Author	島崎, 隆夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.11 (1961. 11) ,p.1032(100)- 1033(101)
JaLC DOI	10.14991/001.19611101-0100
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19611101-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

中島健一著『稲作社会の発展構造』

本書は早稲田大学教授である著者の既発表の論文をまとめたものである。まず序章において著者は旧来の「地理的決定論」を批判しマルクス主義により「歴史地理学」の方法論を樹立せんとし方法論的反省を試みる。この立場に立ち、著者は日本をふくめての「東洋的社会」の停滞性と特殊性の根源を「水田営農の歴史的意義と役割」の中に求め、そこに東洋的社会を規制する重要な物質的基礎があると指摘する。この解明が本書の主要課題である。

「地理的決定論」に十分警戒を払いつつ、著者は、水田稲作農法が成立するための自然的基礎を重視し検討する。わが国稲作は「水稲」ではなしにまず「陸稲」形式で行われ、弥生式時代以降水稲経営に転化し、それによってわが国は西欧社会にみられる畑作営農の社会的条件と異る歴史的条件を展開するに至った。この水田営農が東洋的社会の基礎であり水田営農の自然的基礎として「水」の問題を重視する。水は単に農業用水としてではなく「水の原初的な役割と意義」としてつかまれ、水田稲作営農と「水田土壌」との関係において、水田土壌のもつ理化学的特殊性として理解される。水田は灌水条件さえ良好であればほとんど無施肥で、粗放的経営による連作を可能とし、常に一定量の収量を自然そのものによって永久的に保証される特質がある。これに反して、畑作営農の場合には無施肥での連作は不可能であり、著しく収穫を減少する。そのため畑作営農の特殊な生産技術と農業社会が形成される。結局水田土壌と畑作土壌とのもつ理化学的特殊性の相異に自然的基礎をおき、二つの異った農業社会の構造とその史的発展が生じて来たと著者は主張する。この点を土台として、水田稲作営農社会における生産諸力のあり方、近代的諸関係の成立にみる特殊性を把握し、近代化の過程にみられる停滞性と後進性を検討する。「零細な、主穀式・水田営農の自然的・歴史社会的条件のなかにわが国における本源的蓄積の特殊性を追究し、また生産力の形成の諸モメント、生産的実践の諸過程をはじめ、すべての社会諸関係において、古いもの、古代的なもの、前近代的なもの、なかば封建的なものを残存させ、あるいは、それらを遺制化した物質的根源」（一七五頁）を検証している。補遺として「マラヤの母系制社会」の既発表の論文がある。

著者によって、東洋的社会の停滞性と後進性は終局において水田稲作営農にその物質的基礎が求められ、さらにその特質は水田土壌のもつ理化学的特殊性の中に求められた。一般的に、原理的に、このことが是認されるとしても、同じく水田稲作営農を試みる東洋的社会の異った国々が歩んだ具体的な史的発展、わが国において地域的にみて相異った発展を、根本的には東洋的社会として総括的に把握される性格を持ちながらも、すぐれて歴史的に検討さるべき必要があり、問題は著者の解明された時点よりはじまるように思われる。

水田稲作営農が終局的に「水田土壌」の理化学的特質により理解され、水田の極めて有利な側面と技術の容易さが指摘されたのであるが（九六頁）、他面水田なるが故にもつ極めて不利な側面、技術の容易さではなく困難乃至特殊性についての認識は「水」の持つ問題を解く一つの鍵であると思われる。

東洋的社会の停滞性と後進性についての研究は長い歴史をもっている。西欧社会が中世を否定し、近代資本主義をいちはやく完成し、政治、軍事、経済、文化的な優越を他の世界に主張しその支配を肯定した時から、東洋的社会の特質と、その秘密は西欧社会の側から、西欧農業・工業との対比で、水田稲作営農の中に、いちじるしく自然的に理解されて来た。東洋社会はその呪文の中におかれて来た。今や東洋的社会は、東洋的社会の側よりみつめられ、西欧社会により指摘された「停滞性と後進性」とを、反省し、実践的に打破しようとする機運にある。それは宿命として理解されるのではなく、歴史的に理解される必要があるであろう。

歴史地理学の立場からの発言であるが、著者の東洋的社会の秘密を解明せんとする真剣な態度とそのすぐれた成果は学ぶべき多くの点をもっている。一読をすすめる所以である。（校倉書房・A5・二二八頁・五八〇円・昭和三十六年八月発行）　—島崎隆夫—

＊　＊　＊

カール・A・ウィットフォーゲル著 アジア経済研究所訳『東洋的専制主義』

本書は Oriental Despotism: A Comparative Study of Total Power, Yale University Press, 1959 の全訳である。かつて二十数年前アジア的生産様式論のはなやかであった頃翻訳されたウィットフォーゲルの主著「支那の経済と社会」上下二巻は〝ベストセラー〟と称され、その水の理論が大規模な水の利用を管理する心要のあるモンスーン地帯における「特に中国の」国家権力の発動の性格・専制的全体主義の必然性を主張して、所謂社会発展の理論と真向から対立するものであることはいうまでもない。それは又個人主義に立つ近代西欧文明による対東洋観でもあり、又旧植民地中国に対する欧米資本投入の弁明ともなっていた。

本書も又その主意の展開に外ならないが、東洋的社会という概念の下に、ヨーロッパを除くアジア大陸全般から中南米の原始的農業社会まで含み、かつそこでナチスドイツまでふくむ全体主義の問題として弾劾しようとしているのがその特徴といえる。それは著者がアメリカに亡命して以後英語で執筆した書物の始めての日本語訳として、アメリカにおける対中国観の基調を形づくる一つの要素とみることができよう。

内容はA5判六七五頁の中に根強く貫かれる「水力経済」・「水力社会」・「水力的財産」・「水力国家」——「全体的にして仁愛なき専制権力」・「全体的屈従」のモチーフのヴァリエーションにつきる。著者が、国民所得総額の中にしめる農業所得がすでに五〇％を割り、百年来の大凶作をこえて餓死者を出さないほど増大した商品市場・労働市場をみて、しかも自然経済・専制主義の幻を捨てないのはどこに原因があるであろうか。日本及び中国の学会で幾多の研究と論争を経て中国における資本主義の発達が論証され解明され、更に社会主義経済への移行過程で確実に生産力構造の変化が示される今日、あたかも新しい衣裳をまとった亡霊の如くあらわれたものの意味は、中国経済研究者ならずとも一考の必要があるように思われるのである。（論争社・A5・六七五頁・二一〇〇円・昭和三六年九月一〇日発行）　—平野絢子—

＊　＊　＊

務台理作著『現代のヒューマニズム』

ヒューマニズムが論じられてすでに久しいが、務台氏のいわれるように、現代の人間問題を中心としたヒューマニズムの研究はまことに少ない。人間存在をその最も基本的な問題とすべき哲学も、不毛と貧血と栄養失調と